

四〇八 西洋の俗は、貨利を貪り、奇巧を競ひ、興造を喜ぶ。闔国の心力を以つて専らこれを此に尽くす。故に其の為す所、輒ち以つて宇宙間に炫耀するに足る。

西洋之俗、貪貨利、競奇巧、喜興造、以闔國之心力、專盡之於此、故其所爲、輒足<sub>三</sub>以炫<sub>二</sub>耀乎宇宙間<sub>一</sub>矣、

【訳】西洋の社会は、金銭の利益を貪り、珍しい技術をこらすことを競い、事業を興すことを喜びとしている。国中がこれらすることに心血を注ぎ込んでいる。したがって、その成果は社会のいたるところで際だって目立っていると言える。

四〇九 人苟くも其の中に入れて、則ち心これが為に怵はれ、目これが為に眩み、以つて其の守る所を失はざるものなし。

人苟入<sub>二</sub>於其中、則心爲<sub>一</sub>之怵、目爲<sub>二</sub>之眩、無<sub>三</sub>不<sub>二</sub>以失<sub>一</sub>其所<sub>レ</sub>守者<sub>一</sub>、

【訳】人は西洋風のそういう雰囲気の中に入ったならば、その目新しさや驚異的利益に心奪われ目が眩んでしまい、我々が守らなければならない人のあり方、生き方(仁愛・正義・質実さ等)を失ってしまう。

四一〇 是に於てか彼の俗を習ひ、彼の政を学び、国を挙げて以つて西洋と為らざるものは稀なり。

於是乎習<sub>二</sub>彼之俗、學<sub>一</sub>彼之政、不<sub>二</sub>舉<sub>一</sub>國以爲<sub>二</sub>西洋<sub>一</sub>者稀矣、

【訳】このようなことで、西洋の社会を習い、西洋の政治を学び、国を挙げて西洋風になつてしまふだろう。

四一一 然れども此れを以つて民に臨み、此れを以つて政を為さば、則ち民は皆利に趨り義を忘れて、俗薄からん。人は皆奢を貴び儉を鄙しみて、国弊れん。俗薄ければ則ち以つて乱を為し易く、国幣るれば則ち以つて図を為し難し。是

れより以往、禍機横発し、患意外に生ず。是れ吾の深く慮るゆゑんのものなり。

然以此臨民、以此爲政、則民皆趨利忘義、而俗薄矣、人皆貴奢鄙儉、而國弊矣、俗薄則易以爲亂、國幣則難以爲圖、自是以往、禍機横發、患生意外、是吾之所<sub>レ</sub>以深慮者也、  
丑三月七日、録示書生、

【訳】しかしながら、このようなことで国民と向き合い、このような政治をすれば、国民は皆利益に走り正しい生き方を忘れ今までの道義は薄れるだろう。人々は皆贅沢を貴び質素な生活を軽蔑して、国は荒廃するだろう。習慣がすっかりしていなければ秩序が乱れやすく、国が荒廃すれば、国の将来を計画することもできなくなる。これから先、禍がよく起こり、国の問題もよく起こってくるだろう。この事を私は深く心配しながら考えていることである。

四一二 在昔漢の文帝の即位の初め、千里の馬を献ずるものあり。而れども帝これを卻く。

在昔漢文帝即位之初、有獻千里馬者、而帝卻之、

【訳】昔、漢の文帝の即位のとき、一日に千里を走ると言われた馬を献上するものがあった。しかし、帝はこれを受けることを辞退された。

四一三 苟くも喜びてこれを受けば、則ち馬又これに継ぎて至らん。特に馬のみならず、白麟・朱雁・靈芝・宝鼎・粉粉然として四方よりして至らん。

苟喜而受之、則馬又繼之而至矣、不特馬而已、白麟・朱雁・靈芝・寶鼎・粉々然自四方而至矣、

【訳】もし、これを喜んで受け取ると、また次の馬を献上する者が現れるだろう。馬だけのことではない、めでたいとされる白い麒麟、瑞鳥とされている赤い雁、瑞草とされるひじりだけ、天子の宝とする鼎などさまざまなものを献上しようとする者が現れることになるだろう。

四一四 一祥瑞至る毎に、則ち百官表を奉じ朝賀し、爵を進め物を賜ひ、而して又時に赦を行はば、上、侈心を長じ、下、冗費を益し、国を蠹み政を妨げ、百敗是より起らん。

每一祥瑞至、則百官奉表朝賀、進爵賜物、而又時行赦、上長侈心、下益冗費、蠹國妨政、百敗自是而起矣。

【訳】帝にめでたいことが起こる度に、役人はこぞってお祝いの文書を贈り、宮中に出てお祝い述べ、帝はその度に土地を与え、官爵を授け、時には恩赦を施行していくことになる。このようになれば、上に立つ役人は、奢り高ぶることが甚だしくなり、下級の役人は無駄な費用を増加させ、国の財政が少しずつ蝕まれ政治の妨げになっていく。国が減びるのはこういうことから始まる。

四一五 今帝卻けて受けず。且つ夫れ謙恭抑畏、克く始めを慎み、後來、漢家の豊富を致して、三代以後の明主と為るゆゑんのもの、其の兆先づ此に見ゆ。

丑三月七日、録して書生に示す。

今帝卻而不受、且夫謙恭抑畏、克慎於始、所以後來致漢家之豊富、而爲三代以後之明主者、其兆先見乎此、丑三月七日 録示書生、

【訳】今、帝は退けて受けられなかった。さらに、謙虚にうやうやしく最初に慎みを示されたのだ。だから、その後漢家は豊かに繁栄して、かつて栄えた三代(夏・殷・周)以後の立派な主君となられたのだ。その兆しをここに見ることができる。

四一六 人、此の学を知らざれば、則ち道、明かならず、而して心、主なし。心、主なければ、則ち内に守る所ある能はず。而して外、吉凶禍福の間に怵はれざる能はざるなり。

人不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>學、則道不<sub>レ</sub>明、而心無<sub>レ</sub>主、心無<sub>レ</sub>主、則不能<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>守、而不能<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>怵<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>吉凶禍福之間也、

【訳】人は、儒学を知らなければ、道徳・人の生き方ありやうというものがはっきり分

からない。そして、心に中心になるものがない。心の中心になるものがないと、その精神を守るところがない。その結果、身は吉凶、禍福、などの外物に、惑わされてしまう。

四一七 外、吉凶禍福の間に怵おそはれて、而も内、守る所なし。是こゝに於いてか或ひは其の知るべからざるに乗じて、これを眩ますに神異妖怪の説を以つてするものあり。

外怵おそ於吉凶禍福之間、而内無所守、於是乎或有乘ま其不可知、而眩くら之以こゝ神異妖怪之説者矣、

【訳】身は外の吉凶、禍福に惑わされて、内面には守っていくものもない。このような状況にあつては、何も知らないとみて、神や妖怪のせいにする者がいる。

四一八 我われ西洋諸国を觀るに、要するに学を知らず。是の故に国として宗教なきことなきも、道を知らざること甚しければ則ち宗教の惑まども亦甚し。是れ彼の国の宗門の乱多きゆゑなり。

我觀西洋諸國、要不レ知學、是故無國無宗教也、不レ知道甚則宗教之惑亦甚、是彼國之所レ以多宗門之亂也、

【訳】私が西洋諸国のことを觀察して端的に申し上げると、儒学の教えを知らない。西洋諸国は宗教が無いことはないのだが、儒学の教えである人としての道を知らないから、宗教上の迷いも混乱も、これまた甚だしい。西洋諸国において、宗門上の争い事が多いのはこの事のためである。